



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	「ディートリヒの歴史叙事詩」における >beasts of battle< のモチーフについて
Author(s)	寺田, 龍男; Terada, Tatsuo
Citation	大学院国際広報メディア研究科・言語文化部紀要, 46, 137-155
Issue Date	2004
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/44948
Type	journal article
File Information	terada46.pdf



「ディートリヒの歴史叙事詩」における
> beasts of battle <のモチーフについて

寺 田 龍 男

「ディートリヒの歴史叙事詩」における > beasts of battle <のモチーフについて¹

寺 田 龍 男

0. 問題提起

「ディートリヒの歴史叙事詩」(historische Dietrichepik)の研究が近年ふたたび盛んになりつつある。このジャンルは、いずれも13世紀後半に成立したと推定される『ディートリヒの敗走』(> Dietrichs Flucht <)²、『ラヴェンナの戦い』(> Rabenschlacht <)³、『アルプハルトの死』(> Alpharts Tod <)⁴という3作品からなるが、従来、特に第二次世界大戦以前の研究史においては特殊な位置づけがなされていた。研究者の多くは、「英雄叙事詩」(Heldenepik)というジャンルでは『ニーベルンゲンの歌』(> Nibelungenlied <)をもっとも重要な作品と位置づけ、「ディートリヒの歴史叙事詩」にはその素材史を究明するための二次的資料のような意義しか認めなかったのである。戦後も長い空白の期間があったが、ミヒヤエル・クルシュマン(Michael Curschmann)やヴァルター・ハオク(Walter Haug)らによって新たな研究対象としての基礎がすえられ⁵、近年急速に研究者の関心を集めつつある。とりわけ Intertextualität、

- 1 Die vorliegende Arbeit ist ein Teilergebnis eines von der Alexander von Humboldt-Stiftung geförderten Forschungsprojektes, das dann mit Hilfe eines noch laufenden Forschungsstipendiums des Japanese Ministry of Education, Science, Sports and Culture (Grant-in-Aid for Scientific Research (C) (2), Project-No. 15520212) erweitert und vertieft werden konnte. 小稿はアレクサンダー・フォン・フンボルト財団の助成で開始し、文部科学省科学研究費補助金(基盤研究(C)(2)・課題番号15520212)の助成を受けて継続する研究の成果の一部である。
- 2 Dietrichs Flucht. In: Deutsches Heldenbuch. Bd. 2. Hrsg. von Ernst Martin. Berlin 1866. Nachdruck Dublin/Zürich: Weidmann 1975, S. 55-215.
- 3 Rabenschlacht. In: Deutsches Heldenbuch. Bd. 2 (→前註), S. 217-326.
- 4 Uwe Zimmer: Studien zu 'Alpharts Tod' nebst einem verbesserten Abdruck der Handschrift. Göppingen: Kümmerle 1972. (Göppinger Arbeiten zur Germanistik 67), S. 123-197. なお以上の3作品については新たな校訂版が近く刊行されるので、小稿の考察結果はそれらによって検証しなければならない。
- 5 Michael Curschmann: Zu Struktur und Thematik des Buchs von Bern. In: PBB 98 (Tübingen 1976), S. 357-383; Walter Haug: Hyperbolik und Zeremonialität von Dietrichs Flucht und Rabenschlacht. In: Deutsche Heldenepik in Tirol. Hrsg. von Egon Kühebacher. Bozen: Athesia 1979. (Schriftenreihe des Südtiroler Kulturinstitutes 6), S. 116-134. ヨアヒム・ハインツレが指摘するように彼らの業績が大きいことは間違いないが(Joachim Heinze: Einführung in die mittelhochdeutsche Dietrichepik. Berlin/New York: de Gruyter 1999, S. 82)、それ以前にハインツ・ルップが戦前の英雄叙事詩研究を克服する新たな視点を提案していることを強調しておきたい(Heinz Rupp: "Heldendichtung" als Gattung der deutschen Literatur des 13. Jahrhunderts. In: Das deutsche Versepos. Hrsg. von Walter Johannes Schröder. Darmstadt: Wissenschaftliche Buchgesellschaft 1969 (WdF 109), S. 225-242)。なお戦後の新しい英雄叙事詩研究を決定的に活性化した功績は、ヴェルナー・ホフマンの総合的

すなわち複数の作品を語句や文のレベルでなくテキストの次元で比較する視点が提起されている⁶。英雄叙事詩によくみられる現象として、描写がしばしばその場その場の語りにまとまりをつける傾向があるため、作品全体を厳密に見わたすと前後の論理に様々な大小の齟齬をきたしていることはよく知られている⁷。ひとつの作品の中で個々の素材に独自性があり、それらが作品自体の構成論理といわば衝突している事実を認識し、そのメカニズムを把握するためにも最近の動向には注目すべき点があり、比較の対象もさらに広がることが期待される⁸。しかしその一方で、個々の作品が様々な素材やモチーフを引き寄せてもいるという観点に立ち、作品それぞれがもつ構成原理を研究しつづけることも必要である。「ディートリヒの歴史叙事詩」についてみると、たとえばエッツェル王(Etzel = アッティラ Attila)の宮廷にディートリヒ・フォン・ベルン(Dietrich von Bern)が身をよせる過程が詳細に描かれることから、すでに述べたように『ニーベルンゲンの歌』と共通の基盤に立つことは明らかである⁹。

「英雄叙事詩」の諸作品では戦闘の描写が大きな位置を占める。中世のドイツ語圏で書かれたものでは、すでに数種類の邦訳¹⁰もある『ニーベルンゲンの歌』で私たちは容易に確認できるが、「ディートリヒの歴史叙事詩」の作品群では『ニーベルンゲンの歌』を上まわるほど多

研究書(Werner Hoffmann: *Mittelhochdeutsche Heldendichtung*. Berlin: Schmidt 1974 (Grundlagen der Germanistik 14))および一連の関連業績にある。それにもかかわらず、ホフマンの功績を過小評価するかのような印象を与える研究史が記述されているのはまことに遺憾である。

- 6 Vgl. Elizabeth Lienert: *Dietrich contra Nibelungen*. Zur Intertextualität der historischen Dietrich-epik. In: PBB 121 (1999), S. 23-46; dies.: Die historische Dietrich-epik als 'späte Heldendichtung'. In: ZfdA 129 (2000), S. 154-175; Sonja Kerth/Elizabeth Lienert: *Nachnibelungische Heldenepik: Forschungsstand und Forschungsaufgaben*. In: *Jahrbuch der Oswald von Wolkenstein-Gesellschaft* 12 (2000), S. 107-122; Elizabeth Lienert: *Heldenepik heute*. In: *Archiv für das Studium der neueren Sprachen und Literaturen* 238 (2001), S. 241-259.
- 7 Joachim Heinze: *Mittelhochdeutsche Dietrich-epik*. Zürich/München: Artemis 1978 (MTU 62), S. 170ff. (Punktualität der Darstellung).
- 8 日本でもたとえば『曾我物語』の語りについて、「その場の趣向に工夫をこらすが、それを優先するあまり、物語全体に目が行き届いていないという印象が強い」(梶原正昭・大津雄一・野中哲照(校注・訳)『曾我物語』(小学館)2002年(新編日本古典文学全集53), 400頁)と指摘されている。このような現象はおそらく他の文化圏にも広く見られる現象であり、比較による研究の進展が期待される。
- 9 『ディートリヒの敗走』と『ラヴェンナの戦い』は共通の筋立てで構成されている。主人公ディートリヒ・フォン・ベルンの父親が死ぬと、伯父のエルムリヒ(Ermrich)が圧倒的に優勢な兵力をもって侵略してくる。ディートリヒはフン族の王エッツェルの支援を受けることに成功し、勇士たちとともに悪王エルムリヒの軍と激しい戦闘を繰り広げる。局地戦では何度も勝利するものの、ディートリヒはエッツェルの王子二人と自分の弟ディートヘア(Diether)を失い、領国を回復することができぬまま戦いを諦める。エッツェルの宮廷に戻り、許しを得るところまでが描かれる。『ニーベルンゲンの歌』は、この事件を前提としてディートリヒやエッツェルを登場させている。クルト・ルーも、『ニーベルンゲンの歌』はディートリヒ(叙事詩)にもっと引き寄せて解釈すべきであると述べている(Kurt Ruh: *Verständnisperspektiven von Heldendichtung im Spätmittelalter und heute*. In: *Deutsche Heldenepik in Tirol* (→註5) S. 15-31, hier S. 30)。なお写本伝承の面でも、『ディートリヒの敗走』と『ラヴェンナの戦い』が一貫する物語とみなされていたことは間違いない。断片を除いて4写本が、いずれも両作品を並べて配置しているからである。
- 10 邦訳には相良守峯(訳)『ニーベルンゲンの歌』(上・下)(岩波書店)1975年(岩波文庫401-1, 2)などがあるが、最新の業績として岡崎忠弘(訳)『ニーベルンゲンの歌』(上)(溪水社)1989年があり、下巻の刊行が待たれる。

くの戦闘場面が描かれ、時には残酷な記述も見られる。多くの作品で戦士たちの勇敢な戦いぶりが主題となるのは当然だが、戦いが命をかける行為である以上、敵味方を問わず、死傷の場面も少なくない。描写をリアルにしようとするれば、彼らのいたいたしい姿も勇士たちの活躍に劣らず詳細に描かれることになる。

小稿の目標は、中世の文芸作品という前提に立った上で「ディートリヒの歴史叙事詩」の戦闘場面を分析し、作品の構造とその構成原理を記述することである。考察の出発点として、まず > beasts of battle < のモチーフをとりあげる。これは戦場に横たわる死者を鳥獣がついばむ描写であり、以下に述べるように中世の文芸作品や歴史書には広くみられ描写手段である。ところが、研究者の中にはその「広がり」を認めない傾向がある。ここではまずその傾向に対する反証を挙げ、次にこのモチーフと関連する若干の背景事項に関する考察を行う。

1. 叙事詩における > beasts of battle < のモチーフ

オランダの研究者ノルバート・フォーアヴィンデン (Norbert Voorwinden) は、このモチーフについて「ウェルギリウスから『ローラントの歌』にいたる英雄叙事詩の伝統の中に確固とした位置を占めている」とし¹¹、以下の描写例を挙げる。

alitibus linquere feris aut gurgite mersum
unda feret piscesque inpasti volnera lambent.¹²

むしろ打ち棄て猛鳥の、くらうにまかせ深淵に、むしろ投げ棄て行く波の、運ぶにまかせ魚どもが、飢えを満たして傷口を、思う存分嘗めるがいい！」

(『アエネーイス』 X, 559-560)¹³

dinen botech gibe ich den himelvogelen.’ おまえの遺骸は鳥に晒してやるぞ。」

(『ローラントの歌』 v. 4061)¹⁴

フォーアヴィンデンはこうした流れの中に『ディートリヒの敗走』の2例を位置づける。

11 Norbert Voorwinden: Das intendierte Publikum von 'Dietrichs Flucht' und 'Rabenschlacht'. In: 2. Pöchlarn Heldenliedgespräch. Die historische Dietrichepik. Hrsg. von Klaus Zatloukal. Wien: Fassbaender 1992. (Philologica Germanica 13), S. 79-102, hier S. 84f.

12 Vergil: Aeneis. In Zusammenarbeit mit Maria Götte hrsg. und übersetzt von Johannes Götte. 7. Auflage. München/Zürich: Artemis 1988. X, 559-560.

13 ウェルギリウス『アエネーイス』(下) 泉井久之助(訳)(岩波書店)1976年(岩波文庫115-2)、201頁。

14 Das Rolandslied des Pfaffen Konrad. Hrsg., übersetzt und kommentiert von Dieter Kartschoke. Stuttgart: Reclam 1993 (RUB 2745).

dâ sulen vogel unde tier	鳥や獣の飢えを
büezen irs hungers gir	やつらの骸と血で
mit âse und mit bluote.	満たしてやろう。

(『ディートリヒの敗走』 v. 8459-61)

die Ermrîchen hörten an,	エルムリヒの手の者は野に倒れたまま
die wurden den vogelen dâ verlân:	鳥に晒されていた。 ¹⁵

(『ディートリヒの敗走』 v. 9891-92)

ドイツの古英語文学研究者ヨーゼフ・クレグラーフ (Josef Klegraf) は、> beasts of battle < のモチーフが戦いの描写、広間での宴、船旅と並んで英雄文芸にもっともよく用いられるトポスのひとつであるという。そのクレグラーフが編訳した古英語の『ユーディト』においても、戦いを描写するコンテキストの中でこのモチーフが2度用いられている。

pæs se hlanca gefēah // wulf in walde / ond se wanna hrefn, // wæl-gīfre fugel.
/ Wistan bēgen, // pæt him ðā pēōd-guman / pōhton tilian // fylle on fāægum. /
Ac him flēah on lāst // earn, āētes georn, / ūrig-feðera. // Salowig-pāda / sang
hilde lēōð, // hyrned-nebba. (---) / Stōpon heaðo-rincas,
森のやせ狼、殺しに貪欲な鳥黒鴉はこれを喜んだ。共によく知っていた、武士たちが己れ
らに死すべき者を馳走してくれることを。そのあとを飛ぶ露に濡れた翼の角くちばしをし
た餌食を飽かず求める羽毛黒き鷺は戦いの歌をうたった。

(『ユーディト』 v. 205b-212b)¹⁶

15 なおモチーフの共通性という意味では、『ラヴェンナの戦い』から以下の場面もつけ加えてよい。勇士ヴォルフハルト (Wolhart) の発言が、間接的ながら戦死者は鳥獣に晒されるという戦いの実態を示唆していると認められるからである。

‘ich vürhte mir niht sêre:	「私は不安などありません。
ist ir vil, wir slahen ir destē mēre.	敵が多ければ、ますます多く打てばよし。
Raben unde gīre	数限りなき鳥に秃鷹が
die wartent âne zal.	てぐすね引いて待っている。
edel Dietleip von Stîre,	シュタイアのディートライブ殿、
nû schouwe nider ûf daz wal:	合戦の場を見下ろして御覧なされ、
si wartent vaste der tōten.	獣たちが死者を待っている。
si enruochten wær wir alle nû verschrōten.	我々が切り刻まれるのを望んでいる。

(『ラヴェンナの戦い』 Str. 526, 5-527, 6)

16 Die altenglische Judith. Hrsg. . ins Deutsche übersetzt und kommentiert von Josef Klegraf. Stuttgart: helfant 1987. 羽柴竹一 (編訳) 『古英詩大観』 (原書房) 1985年、128頁。

後のヘブル人との闘いで倒れた男たちも、「狼の喜びとなり、飽くことなく殺戮を好む鳥どもの楽しみとなった」と記されている¹⁷。類似の例は『ブルナンプルクの戦い』と『ベーオウルフ』にも認められる。

Letan him behindan / hræ bryttian // saluwig padan / þone sweartan hræfn //
hyrned nebban / [ond] þane hasewan padan // earn æftan hwit / æses brucan //
grædigne guð hafóc / [and] þæt græge deor // wulf ón wealde.

彼らは黒い衣着て堅い嘴もった漆黒の鴉に ^{しかばね}屍を残してこれを味わわせ、また薄色の衣着て尾の白い鷺に獲物を楽しませた、が ^{かいしよく}つつがつした戦いの鷹と灰色の獣、森の狼にも。

(『ブルナンプルクの戦い』 II. v.60-65)¹⁸

ac se wonna hrefn // fūs ofer fāægum / fela reordian, // earne secgan, / hū him
æt āete spēow, // þenden hē wið wulf / wæl rēafode.”

黒鴉は生命尽きた者に群がって鳴き立て、鷺もその餌食の首尾如何を言い立てよう、狼と競って骸を貪りながら。」

(『ベーオウルフ』 v.3024b-3027b)¹⁹

こうした描写が中世の英雄文芸において一定の地歩を占めていたという主張に異議はない²⁰。しかしこのトポス（と認めてよいであろう）はけっして英雄文芸に固有の描写手段なのではない。クレグラーフの「戦死者を獣が喰うというモチーフは、開戦への決議、武器の詳しい描写、戦利品の獲得等と並んで聖書には見られない」という見解²¹には反証がある。旧約聖書の『エレミア書』に

またわたしはこの所でユダとエルサレムの計りごとを打ち破り、つるぎをもって、彼らをその敵の前と、そのいのちを求める者の手に倒れさせ、またその死体を空の鳥と地の獣の食べ物とし、

(『エレミア書』 19, 7)²²

17 wulfum tō willan / ond ēac wæl-gīfrum // fuglum tō frōfre. / Flugon ðā, ðe lyfdon, In: Die altenglische Judith (→前註), v.295a-296b. 『古英詩大観』 (→前註)、130頁。

18 Two of the Saxon Chronicles. Ed., with introduction, notes, appendices, and glossary by Charles Plummer. Oxford: Clarendon 1892, p. 109. 『古英詩大観』 (→註16)、122頁。

19 Beowulf. Ed. by C. L. Wrenn. London: Harrap 1973. 山口秀夫 (対訳・註解・編者) 『古英詩ベーオウルフ』 (泉屋書店) 1995年、187頁。

20 クレグラーフは『ユーディト』を「英雄文芸」(Heldendichtung)とみなしている。

21 Die altenglische Judith (→註16), S. 22f.

22 『聖書』(日本聖書協会) 1978年、旧約聖書1079頁。

と明確に記されているからである²³。聖書に記されていれば、その記述を範とした中世の知識人による文書世界にこのモチーフが入り込むのは必然である。『オットー・フォン・ザンクトブラーズィエンの年代記』(> Die Chronik Ottos von St. Blasien <)では、1166年、傲慢な脅しをかけてきたマインツの大司教クリスティアンとその全軍を、ローマ人たちが「空を飛ぶ鳥や地を行く野獣たちに喰らわせてやろうとした」と記されている²⁴。

『ディートリヒの敗走』や『ラヴェンナの戦い』など「ディートリヒの歴史叙事詩」が成立した当時(13世紀後半)は、現実の社会においても政治的に重要な時期だった。1278年にデュルンクルート(Dürnkrut)の戦いでルードルフ・フォン・ハーブスブルク(Rudolf von Habsburg)がボヘミア王オトカル(Ottokar)を破って覇権の確立に大きな一歩を踏み出したことは周知の事実だが、この戦闘の様子を伝える『コルマル年代記』(> Chronicon Colmariense <)には、ボヘミア側の死者が戦場に多数、しかも長期間放置されていたため強い悪臭が漂ったという描写に続いて「狼も犬も鳥も食いつこうとはしなかった」と記されている²⁵。この例からも、戦場の鳥獣にまつわる表現が当時広く慣用句化していたことは明らかである。

史書の世界に目を向ければこのような例はいくらでも見出すことができるだろう。つまり私たちは、冒頭に挙げた従来の研究動向の見方、すなわち> beasts of battle <のモチーフを英雄叙事詩というジャンルの枠の中だけで考察するのではなく、聖書やウェルギリウスの記述に端を発して西洋文化に広く行き渡っていたトposであるという事実をまず認識しなければならない。

中世の文書世界の共有財産となったのであれば、このモチーフが様々な文芸ジャンルで用いられるのもまた自然なことだった。たとえば12世紀後半のフランス語詩人クレティアン・ド・トロワ(Chrétien de Troyes)の『ペルスヴァル』(> Perceval <)に次のような場面がある。物語の冒頭、人里離れて暮らす主人公が森の中で5人の騎士と出会ったことをきっかけに、自分も騎士になりたいと告げる。すると母親は、彼の出自が本来騎士の家柄であること、しかしそれぞれ騎士であった父親とふたりの兄は悲惨な運命をたどったことを語る。父親は傷ついて不自由な体になり、兄二人はともに戦いに倒れた。しかも長兄は「両目をカラスどもに挟り

23 『エレミア書』16, 4の記述も関連するものとして挙げておく。「彼らは死の病にかかって死に、哀悼する者もなく、埋葬する者もなく、地のおもてに、糞土のようになる。またつるぎと、ききんに滅ぼされて、その死体は空の鳥と地の獣の食い物となる。」『聖書』(→前註)、旧約聖書1074頁。

24 (….) sed ipsum [= Erzbischof Christian von Mainz] omnemque eius exercitum volucris celi et bestiis terre in escam super faciem terre ea die se daturus arrogantissime minantur (…). In: Die Chronik Ottos von St. Blasien und die Marbacher Annalen. Hrsg. und übersetzt von Franz-Josef Schmale. Darmstadt: Wissenschaftliche Buchgesellschaft 1998. (Ausgewählte Quellen zur Geschichte des deutschen Mittelalters 18a), S. 54.

25 quod nec lupi nec canes nec aves comedere voluerunt. In: Andreas Kusternig: Erzählende Quellen des Mittelalters. Die Problematik mittelalterlicher Historiographie am Beispiel der Schlacht bei Dürnkrut und Jedenspeigen 1278. Wien: Böhlau 1982, S. 120.

取られた姿で死んでいるのが見つかり、悲しみのあまり父親も死んでしまった。ペルスヴァルの母親は、三人目にして最後の息子だけは不幸な目に遭わぬよう、騎士にはならせまいと決心していた。しかもその決意はなみなみならぬもので、騎士というものの存在すら息子に教えていなかった。戦死者の遺体が鳥獣によってついばまれるという悲惨な実態が彼女の心を深く傷つけていたからである²⁶。

ここで私たちは、「恒常的戦争状態」ともいわれる中世において²⁷、人間の生活がたえず武力行使をとともう紛争に脅かされていたことを思い出したい。好むと好まざるとにかかわらず、当時の人々の生活に軍事や紛争はいやがうえにも入り込んでいたのである²⁸。犠牲者を悼む感覚が麻痺することはありえなかった。まして戦場に取り残された遺体を鳥獣が喰らうという状況が人々に呼び起こす感覚は強烈だったろう。だからこそ、> beasts of battle < は歴史書や文芸作品²⁹で繰り返し用いられる定形表現となったのである。

ちなみに歴史物語『アポロニウス』(> Historia Apollonii regis Tyri <)には以下の記述がある。

26 Chrétien de Troyes: Der Percevalroman. Übersetzt und eingeleitet von Monica Schöler-Beinhauer. München: Fink 1991. (Klassische Texte des Romanischen Mittelalters in zweisprachigen Ausgaben 23), v. 364-488. 天沢退二郎 (訳) 『ペルスヴァルまたは聖杯の物語』(新倉俊一・神沢栄三・天沢退二郎 (訳) 『フランス中世文学集 2』(白水社) 1991年 141-323頁)、151頁。ここで私たちは > beasts of battle < の描写に対する中世当時の人々の反応をうかがい知ることができる。しかしそれだけではなく、作品成立から800年以上過ぎた世界に生きている受容者も時代を超えて、当時の作品をとりまく詩人や聴衆たちと同じ感覚をもっていることを確認できる。すなわちクレティアンが彼の聴衆に向けて戦争の残酷な一面として描き、人々のあいだに(少なくとも一定程度の)悲しみと怒りを想起させようとした場面は、時代の隔たりにもかかわらず、今日でも同じ効果を私たちに及ぼすことができるのである。いやそれどころか文化の異質性をも超えて、普遍的に人の心を動かすと認めてよい。Vgl. Horst Brunner: Das Bild des Krieges bei Chrétien de Troyes. In: Spannungen und Konflikte menschlichen Zusammenlebens in der deutschen Literatur des Mittelalters. Bristoler Colloquium 1993. Hrsg. von Kurt Gärtner/Ingrid Kasten/Frank Shaw. Tübingen: Niemeyer 1996. S. 113-122, hier S. 120f.

27 Josef Fleckenstein: Ritterschaft zwischen Krieg und Frieden. In: Träger und Instrumentarien des Friedens im hohen und späten Mittelalter. Hrsg. von Johannes Fried. Sigmaringen: Thorbecke 1996 (Vorträge und Forschungen 43) S. 151-168, hier S. 151.

28 文芸作品を見ても、恋愛をテーマにした抒情詩のようなジャンルを除けば、程度の差はあってもほとんどすべての作品が武力行使と関係する記述を内に含んでいるといってよい。また一見して紛争と無関係に見える作品でも、実は舞台が城の中に設定されていることなどを考慮すると、軍事に関連する要素と無縁であることはやはり少ないといわなければならない。

29 ただしここでは立ち入ることができないが、当時の通念で「史書」と「文芸作品」がどう区別されていたかも考慮する必要がある。Vgl. Hans-Werner Goetz: "Konstruktion der Vergangenheit". Geschichtsbe- *Goetz*
wußtsein und "Fiktionalität" in der hochmittelalterlichen Chronistik, dargestellt am Beispiel der Annales Palidenses. In: Fakten und Fiktionen. Mittelalterliche Geschichtsdarstellungen und ihre kritische Aufarbeitung. Hrsg. von Johannes Laudage. Köln: Böhlau 2003, S. 225-257.

et addita vera ratione confusi rapientes Stranguillionem et Dionysiadem tulerunt extra civitatem et lapidibus eos occiderunt et ad bestias terrae et volucres caeli in campo iactaverunt, ut etiam corpora eorum terrae sepulturae negarentur.³⁰

怒った市民はストラングイリオ(Stranguillio)とディオニュシアス(Dionysias)を城門の外へ引き出し、石投げにより処刑した後、遺体を野の獣と空を飛ぶ鳥に晒した。彼らの骸は埋葬されなかった。

遺体が埋葬されず、鳥獣に晒されたのは重罪人、すなわち共同体の敵と見なされたからで、いわば秩序を破ったがゆえに見せしめの刑を受けたのである。つまり『アポロニウス』における描写の背景には、見る者に恐怖感を引き起こす刑罰の思想がある。戦争の相手であれ犯罪人であれ、共同体の平和を乱す者は罰しなければならない。それが秩序を守る重要な掟だったのである。

こうした意識は、戦いの後で味方の遺体は埋葬しても、敵方の遺体は野で鳥獣が喰らうにまかせるという考え方を生じさせる。見方を変えると、戦場に残された味方の遺体を回収することは、生き残った者の大切な使命となるのである。先に見た『オットー・フォン・ザンクトブラーゾイエンの年代記』では、戦いに敗れた側の苦しみ様子が伝えられている。それによると、1166年に起きたドイツ司教たちとの戦いの後ローマの人々は、残されたままの味方の遺体を回収するため戦場に向かう。しかし司教たちは兵を送ってこれを撃退してしまう。ローマ人は結局司教側に使者を送り、死者及び捕虜の数を数え、誓いを立てた上でこれを文書に記し、平和を約定した後で初めて死者を埋葬する、という条件でようやく許しを得ることができたのである³¹。

30 Historia Apollonii regis Tyri. Die Geschichte vom König Apollonius. Übersetzt und eingeleitet von Franz Peter Waiblinger. Neuausgabe München: Deutscher Taschenbuch Verlag 1994 (dtv zweisprachig 9324), S.116. この記述はハインリヒ・フォン・ノイシュタットのドイツ語版(1300年頃成立)にも受け継がれている。Vgl. Heinrichs von Neustadt 'Apollonius von Tyrland' nach der Gothaer Handschrift, 'Gottes Zukunft' und 'Visio Philiberti' nach der Heidelberger Handschrift. Hrsg. von S. Singer. Berlin 1906. Nachdruck Dublin/Zürich: Weidmann 1967, S. 273 (v. 17187-198).

31 Mane facto Romani ad tollenda cadavera occisorum ad locum belli properantes per presules immissis in eos militibus fugantur reversique ad Urbem vix evadunt. Tandem missis ad presules nunciis, ut amore sancti Petri et respectu christianitatis eis mortuos suos tollere liceat, suppliciter obsecrant. Quod a presulibus hac condicione est concessum, scilicet ut occisorum vel captivorum eo prelio numerum ex sua parte computantes sub attestatione iurisiurandi ipsis scripto presentarent et sic demum pace data mortuos suos ad sepulturam tollerent. Qua computatione facta invenerunt occisorum seu captivorum de suis hoc prelio numerum ad quindecim milia dataque licencia cadavera occisorum demum cum maximo eiulatu tollentes sepelierunt. In: Die Chronik Ottos von St. Blasien (→註24), S. 56. 高貴な身分の戦死者の遺体は教会に運ぶ配慮がなされたが、他の遺体は通常戦場に埋葬された。Vgl. Norbert Ohler: Krieg und Frieden im Mittelalter. München: Beck 1997. (Beck'sche Reihe 1226), S. 277. 身分の高い者から順に埋葬するという秩序は堅く守られている。Vgl. auch Die >Nibelungenklage<. Synoptische Ausgabe aller vier Fassungen. Hrsg. von Joachim Bumke. Berlin/New York: de Gruyter 1999, v. 2298f., 2350-53, 2361-2418 (Fassung B).

2. 「ディートリヒの歴史叙事詩」における > beasts of battle < 関連表現

以上の点をふまえると、冒頭に挙げた『ディートリヒの敗走』の解釈も一歩深めることができる。先に引用した「鳥獣の飢えを骸と血で満たして」という場面(v. 8459-61)には、敵によって処刑された女性たちを絞首台から下ろして埋葬する描写が先行している。

si clagten dirre vrouwen tôt.	彼らはこの貴婦人たちの死を嘆いた。
man hiez si ab dem galgen nemen.	絞首台から下ろす命令が下された。
als ez in wol muoste zemen,	女性たちは城外で、それぞれにふさわしい
si wurden begraben vür die stat.	よう埋葬された。

(『ディートリヒの敗走』 v. 8426-29)

捕われて殺された高貴な女性たちの「埋葬」が、上記の「野晒し」の場面と強いコントラストをなしていることは明らかであり、ここに当時の社会通念が反映しているとみることは十分可能だろう。戦いの後ディートリヒは、味方の遺体を何としてでも回収するよう命じているが、これも同じ文脈でとらえるべきである。

von Berne der vogt sprach	ベルンの殿はいたるところの
zuo den recken über al	戦士たちに言った。
‘ir helde, nû gêt ûf daz wal	「さあ勇士たちよ、戦場へ行き
und suochet ûz dem bluote	血の海から高貴なる戦士を
die edeln recken guote.	探し出すのだ。
tuot ez iu selben ze heile.	それを自分の善行となせ。
lât si werden niht ze teile	遺体を悪しき獣に
dem böesen unkunder.’	喰わすではないぞ。」

(『ディートリヒの敗走』 v. 9880-87)

同じ遺体でも敵方のものは関心の対象外であり、はたしてこの後、先に引用した「エルムリヒの軍勢の遺体は鳥に晒された」という場面が続くのである³²。したがってここまでは闘争心や復讐心が前面に押し出されているといわなければなるまい。血で血を洗う殲滅戦の本文には敵に対する「怒り」「憎悪」(zorn, haz, nît)や「復讐(する)」(râche, rechen)という表現も頻出している。

しかし作品の語り手はやがて受容者の視点を転換に導く。凄惨な死闘が繰り返される『ディー

32 『ディートリヒの敗走』ではこの他にも v. 6653-55, 6666f. で「埋葬」と「野晒し」の対照をなす描写がなされている。

トリヒの敗走』も結末を迎えると、ディートリヒは味方だけでなく敵方の戦死者の遺体も埋葬させる。

Her Dietrich tete des man in bat. er begie ein tugent an der stat, daz vil selten dehein künic ie solhe tugende begie hie bevor bi ir tagen. er hiez ûz dem bluote tragen vil nâch die besten alle. swie si im warn ein galle gewesen, die Ermrîches man, und swie leit si im heten getân, doch hiez er si alle begraben und clagete si mit ungehaben und beweinte einn ieslichen man. swie leide er im hete getân, der ungetriuwe Ermrîch, man bestattes vaste gütlich.	ディートリヒ殿は乞われたことをした。 殿はその場で徳ある行いをしたが、 これほどの善行はかつて いかなる王の時代にも なされなかったであろう。 血の海から高貴な者たちの ほぼすべてを運び出させたのである。 彼らすなわちエルムリヒ王の家来たちは 殿には怒りのまとはあったが、 そして殿は大きな被害を被ったが、 それでも殿は彼らをみな埋葬させ 身をもって死を嘆き ひとりひとりのために泣いた。 悪しきエルムリヒが 殿にひどい苦難をもたらしたはしたが、 家来たちは丁重に葬られたのである。 (『ディートリヒの敗走』 v. 10045-60)
---	---

この場面で語り手が主人公の徳をたたえる姿勢は、> beasts of battle <を描く視点と表裏一体とみてよい。通常は埋葬の対象とならない敵の死者をも弔うことで主人公ディートリヒ・フォン・ベルンの徳の高さが強調されるからである³³。

残酷な描写は上記の> beasts of battle <に限らない。血で血を洗う殲滅戦では、> beasts of battle <以外にも残酷な場面が頻出する。戦いがエスカレートした段階を描く『ラヴェンナの戦い』では、以下のようなパターン化した表現が目につく。

①一騎打ちの際の衝撃で両目から血や脳漿が吹き出す。

im [= Rûmolt] brast daz bluot ûz ze beiden ougen.

33 この徳目については『マタイによる福音書』(5, 44)の「汝の敵を愛し、迫害する者のために祈れ」(『聖書』→註22, 新約聖書7頁)という表現を思い出すべきだろう。敵と味方(あるいはキリスト教徒と異教徒)を区別しないというテーマは、中世文学に大きな広がりをもっており、『ニーベルンゲンの哀歌』などにも共通の記述がある。Vgl. Die > Nibelungenklage < (→註31), v. 1840-50, 2180f., 2347-49 (Fassung B).

ルーモルトの両目から血が吹き出した。 (『ラヴェンナの戦い』 Str. 245, 6)³⁴

- ②ふり下ろされた剣によって相手の頭が割れるどころか、両眼の間から顎の骨までまっぶたつに割れるというパターンの描写（あるいはその類例）が頻出する³⁵。

zwischen sinen [= Scharphes] ougen	シャルフェの眉間にヴィテゲは
dâ stach er [= Witege] im des tôdes zil.	死ねとばかりに剣を突き刺した。
durch hirne und durch zende	手に渾身の力をこめ、王子の脳と
sluoc er daz kind mit manlicher hende.	齒列を打ち砕いた。
	(『ラヴェンナの戦い』 Str. 405, 3-6) ³⁶

- ③身体を貫通した槍。

die gêre man durch die brünne schôz,	飛んだ槍は胸甲を貫き、
daz si in dem lîbe stahen.	体に刺さったままになっていた。
	(『ラヴェンナの戦い』 Str. 771, 4-5) ³⁷

- ④死傷者の流したおびただしい血が川のように戦場をおおうという描写や、そうさせるという決意を戦士が述べる場面も繰り返されている。

Dâ sturben helde guote	優れものの勇士や
und recken ûz erkorn.	えり抜きの ^{もののふ} 武士が死んでいった。
si wuoten in dem bluote	彼らは血の海の中
an maneger stat unz über die sporn.	至る所で拍車まで浸かっていた。

34 類例 Str. 444, 3f.; Str. 631, 1-5; Str. 792, 6; Str. 904, 3-6.

35 Vgl. Kusternig, Erzählende Quellen (→註25), S. 81, 116. 1278年8月26日に戦場で死んだボヘミア王オトカルは、正面からの強い打撃によって頭頂部から鼻根まで完全に割られ、いくつかの亀裂が上顎まで達していたことが遺体の調査で明らかにされている。 Andreas Kusternig: Die Schlacht bei Dürnkrut und Jedenspeigen am 26. August 1278. In: Böhmisch-österreichische Beziehung im 13. Jahrhundert. Hrsg. von Marie Bláhová/Ivan Hlaváček. Prag: Das Österreichische Kulturinstitut Prag/Philosophische Fakultät der Karlsuniversität 1998. S. 185-215. hier S. 211.

36 類例 Str. 436, 4-437, 2; Str. 454, 3-455, 6; Str. 660, 3-5; Str. 663, 6-665, 2; Str. 668, 4-6; Str. 748, 6-749, 3; Str. 756, 1f.; Str. 762, 3-6; Str. 781, 3-5; Str. 804, 6-805, 2; Str. 810, 1-6; Str. 821, 1f.; Str. 825, 1-6; Str. 830, 3-6; Str. 953, 6-954, 4; Str. 997, 6-998, 3; Str. 999, 3-5; Str. 1001, 6-1002, 2.

37 類例 Str. 666, 6-667, 2.

si wurben nâch des tôdes ende.

みな死ぬ気で戦っていたのだ。

(『ラヴェンナの戦い』 Str. 745, 1-5)³⁸

定形表現が繰り返されるのは残酷な場面だけではない。フン族の王子であるシャルフェとオルテおよびディートリヒの弟ディートヘアがそれぞれ一騎打ちでヴィテゲと戦ってみな命をおとす場面(Str. 395-464)は、上記のような凄惨な描写だけでなく、同じ日に起きたにもかかわらず個々の激しい戦いが「日没まで」(Str. 429, 450)続き、ヴィテゲは瀕死の相手の最後の一撃によって落馬させられている(Str. 407, 439)。

作者が一定の表現手段を繰り返して用いていることは以上の例ですでに明らかだが、見方を変えると、こうした繰り返しによって描写が単調になる危険性を作者はなんら回避しようとしていないといえる³⁹。よく知られているように、この時代の人々にとっては聖書やウェルギリウスなど古典作家(いわゆる Schulautoren)に範をとり、同様の文体やモチーフで作品を形成することが当然の営みだったが、ここでは作者がもつ表現手段が汲みつくされていること、すなわちレパートリーの限界が、私たちの目に晒されているのである。

年代記など歴史書の著作者は聖職者だった。彼らは現実起きた戦いの経過を現世における神の行いの exemplum ととらえ、聖書の記述パターンによって構成しようとしたのである。歴史学者のアンドレアス・クスタニヒ(Andreas Kusternig)は、聖職者が軍事関係の記述でしばしば犯す誤りについて、著者たちが通常修道院から出ることのない生活を送り、外部から入る資料に依拠せざるをえなかったこと、しかもその資料も聞き書き・また聞きなどで信憑性に欠けていたという論拠で説明する⁴⁰。『ラヴェンナの戦い』は、作者の身近で現実起きた事件の記録作品ではないが、上記のような傾向は、作者を聖職者にとらえる従来の説の根拠、すなわち

38 類例 Str. 517, 3-5; Str. 528, 6; Str. 753, 1f.; Str. 868, 4-869, 5; Str. 518, 6-519, 2; Str. 600, 1-601, 2; Str. 701, 3f.; Str. 743, 3f.; Str. 747, 1-6; Str. 750, 3-5; Str. 996, 5-997, 2. 関連表現 daz veltungen: Str. 601, 5; Str. 611, 4; Str. 613, 6; Str. 830, 4; Str. 855, 5. こうした表現の一方で、血を流すことがキリストの受難であることを思い出させる文言もある。

'got, durch dîner marter êre	「神よ、あなたの受難の名誉にかけて、
und durch daz bluot, daz von dir ran,	そしてお体から流された血にかけて、
nû lâ mich iezuo sterben	どうか私を今この場で死なせて下さい、
und des grimmege tôdes gar verderben!	恐ろしい死に追いやって下さい。」

(『ラヴェンナの戦い』 Str. 893, 3-6)

39 「ディートリヒの歴史叙事詩」に対する戦前の低い評価は、こうした点にも原因が求められる。Vgl. Julius Schwietering: Die deutsche Dichtung des Mittelalters. Potsdam: Athenaion o. J. (1932), S. 217.

40 Andreas Kusternig: Probleme um die Kämpfe zwischen Rudolf und Ottokar und die Schlacht bei Dürnkrut und Jedenspeigen am 26. August 1278. In: Ottokar-Forschungen. Redigiert von Max Weltin/Andreas Kusternig. Wien: Verein für Landeskunde von Niederösterreich und Wien 1978/79 (Jahrbuch für Landeskunde von Niederösterreich N. F. 44/45). S. 226-311, hier S. 264-272.

①軍事的記述が誤りを多く含み、作者にはこの面の知識が乏しかったこと

②地理上の位置関係で誤った表記が少なくないこと⁴¹

という点(これら自体けっして決定的な論拠とはいえないが)と同じ方向性をもつものととらえてよい。

3. エスカレートする戦い

『ラヴェンナの戦い』には、今日の読者に中世の戦争の一面をリアルに伝える情報も盛り込まれている。

①戦いの初期の段階では相手の殺戮・殲滅を目的としていない。

②殺戮戦にエスカレートすると、「もはや生きようとは思わなかった」「もはや相手を容赦しなかった」等の発言で相手への激しい憎悪が表明される。

個人戦の場合はまず相手を脅したり降参を促したりする。しかしそれによる紛争の回避がもはや期待できないということになると、死をも厭わない戦いとなる。

ze lebne si niht gerten.

ふたりとも生き延びようとは思わなかった。

(『ラヴェンナの戦い』 Str. 445, 3)⁴²

この仕組みは集団戦の場合も変わらない。

Ze lebene si niht gerten,

みな生き延びようとは思わなかった。

daz wart dâ vil wol schîn.

それは誰の目にも明らかだった。

ez kunde von swerten

これ以上激しい斬激の嵐など

ein sturm nimmer herter sîn.

ありえたらうか。

si stâchen, sî sluogen,

彼らは刺し合い、打ち合い、

grôzen haz si ûf einander truogen.

互いに憎悪に燃えていた。

(『ラヴェンナの戦い』 Str. 613, 1-6)⁴³

一方、この作品のライトモチーフが「復讐戦」であることは、すでに作品の冒頭で gerechen (= rechnen) の語によって明示されている。

Nû sult ir hoeren gerne

さあみなさま、これから大いなる苦難の

41 Hoffmann: Mittelhochdeutsche Heldendichtung (→註5), S. 162.

42 類例 Str. 716, 6; Str. 788, 6.

43 類例 Str. 604, 3f.; Str. 657, 1-6; Str. 693, 6; Str. 760, 3-6; Str. 824, 1f.; Str. 826, 1-5; Str. 854, 5f.

von grôzer arebeit,	話をお聞き下さい、それはベルンの殿が
wie der vogt von Berne	数々の苦しみを悪しきエルムリヒに
sît gerach sîniu leit	うち晴らした次第でございます。
an Ermrîche dem ungetriuwen.	自分がしでかしたあらゆることを
swaz er ie begie daz kom im sît ze riuwen.	みな悔いる羽目になったのです。
	(『ラヴェンナの戦い』 Str. 4, 1-6) ⁴⁴

戦いが始まるとまもなく、両軍の兵たちがもはや互いを容赦せず、敵を生かしてはおかないと誓う場面が頻出する。さらに相手を生捕りにして身代金を取ろうという（当時通念だった）考えも捨てる。

die starken und die snellen	^{つわもの} 強者も勇者も
die schönnten einander nicht.	もはや相手を容赦しなかった。
	(『ラヴェンナの戦い』 Str. 692, 3f.)

niemen den andern nerte.	誰も相手を生かしてはおかなかった。
	(『ラヴェンナの戦い』 Str. 769, 3)

zesamne truoc si der nît	勇敢で高貴な戦士たち(=ディートリヒ、リ
die hôhen recken ellens rîch.	ューディガー、グンター)は敵意に満ちてい
si bewâgen sich des guotes,	た。もはや財(=身代金)など眼中になく、互
si wâren ûf einander grimmes muotes.	いに殺意を向けるばかりだった。
	(『ラヴェンナの戦い』 Str. 814, 3-6) ⁴⁵

こうした戦いは、戦略としてすべてを破壊する放火略奪(Raub und Brand)の手段に出ることが一般的で、『ラヴェンナの戦い』にもいくつかの用例があるが、敵が立てこもる城にディートリヒが攻め込み、塔と宮殿を破壊させ、さらに火をかけさせている描写は注目に値しよう。主人公の行為に対して何ら非難がましいニュアンスがみられないからである⁴⁶。

ここにいたり、中世の現実の合戦にも宮廷文芸にも広く認められる「敵を生かしたまま捕らえ」ようとする姿勢が消滅したことは明らかである。展開しているのはもはや騎士道のルール

44 類例多数。

45 類例 Str. 696, 3-5; Str. 750, 1f.; Str. 770, 4; Str. 824, 5f.; Str. 839, 3f.; Str. 843, 5f.

46 結局守備隊側は夜になって降伏し、命・名誉・財を委ねている(Str. 1110-14)。中世の文芸作品では、このように放火略奪にネガティブなニュアンスがない例が多い。

にのっとる一騎打ちではなく、集団による殺戮戦である⁴⁷。ここで身代金をあてにする戦いを放棄することがもつ意味を確認しておきたい。

中世ヨーロッパの現実社会において、戦いはけっして常に相手の殲滅を目的に行われたのではない。それは戦いのあり方をみても明らかであるし、軍事に関する負担がいかに騎士たちの生活を苦しめていたかを考えるといっそうはっきりする。

たとえば戦場において、甲冑に兜で重装備をする騎士は全体重が容易に100キロを超えるので、補助する人間なしにはとても戦況の変化に対応できない。またそのような騎士は馬にとっても大きな負担となるから、開戦前に長時間乗せていることができない。まして乗せたまま戦場を駆け回るようなことはとても不可能だった。したがって騎士は合戦の直前まで鎧兜を身につけず、いざという時に初めて武装を整えたのである。さらに兜は顔面をできるだけ広く覆うように作られていたので、外界は細長い隙間を通して見なければなかった。これが馬のコントロールを一層困難にしたため、補助員たちの支援はここでも必要だった。馬が倒れた場合、騎士に余力があり、かつ交代の馬が用意されていれば次の馬に乗ることも可能だったが、その手配ももちろん補助者の手を借りなければならなかった。逆にこうした補助員、すなわち自分では軽装どころか身を守る手立てをほとんど身につけていないにもかかわらず重装備の主君を助ける使命の人々が生き延びたければ、いざ戦闘が始まった場合、会戦の場をどれだけ速く走り抜けることができるかに運命を託さなければならなかったのである⁴⁸。このように戦場への騎行も含めたあらゆる過程で戦闘補助員にきわめて多くを依存していたのが中世の戦闘の実態である⁴⁹。

周知のように、当時の騎士たちにとり、戦役奉仕はたいへん大きな負担だった。第一に鎧や兜に剣・槍といった武具の調達は原則として自分で行わなければならなかった。第二に騎士がひとりいれば馬が3頭必要とされていた。すなわち騎士が戦う際に乗る馬、それ以前の行軍に騎乗する馬、そして盾と槍を運ぶ *knappe* の乗る馬である。(場合によってはもう一頭の馬ないしは荷馬が小姓の代わりに盾と槍を運んだり *knecht* が加わることもあった。) つまり戦争とはひとりひとりの騎士が「小さな部隊」を率いて参加した一大事業だったのである⁵⁰。(こ

47 手を上げて降参したフルオテ(Fruote)を許したディートリヒの徳を讃え、「さもなければディートリヒの家来衆がフルオテを容赦しなかったろう」(Str. 795f.)と語り手がコメントしているのは殺戮戦が横行していた、ないし現実と同じ状況が生じた場合には殺戮が不可避だったことの反映である。

48 Kusternig: Probleme (→註40), S. 277f. それは騎士にとっても過酷な運命を意味した。重装備ゆえ、介助者の去った戦場でひとたび倒れると起き上がるのがいっそう困難になり、相手から剣を甲冑の隙間に突き立てられたらひとたまりもなかったからである。Horst Fuhrmann: *Einladung ins Mittelalter*, München: Beck 1987, S. 57.

49 これらの補助員は必ずしも戦闘員とはみなされていなかったが、その実態についてはよく知られていない。若干の武装をしていたと認められる事例がある一方で、戦闘とは明らかに係わりがなかったと認められる補助員の例も報告されている。Vgl. Kusternig: Probleme (→註40), S. 277; Ohler: *Krieg und Frieden im Mittelalter* (→註31), S. 147f.

うして見ると、合戦の描写で兵力が示される時は、虚構とはいえ仮想空間においてはつねにその数倍の人員が動員されていると考えなければならない。したがってエルムリヒの軍勢から万単位の兵が繰り返して送られる展開は、一面では非現実きわまりないが、まさに作者の意図はその点にあった、すなわちエルムリヒの軍勢がいかに現実離れした兵力を擁していたかを描こうとしたと解されるのである。)

しかし現実の戦闘行為自体は、しばしば「騎士道精神」と無縁の経過をたどった。すなわち相手の城郭や国土は焼き払い、略奪し尽くし、人々の家や畠は荒らされた。女性や子供も容赦なく犠牲となった。野戦で決着をつけるよりも、城や都市を包囲して相手を兵糧攻めで屈服させるという(世界史に共通の)手段がヨーロッパ中世においてもしばしばとられたのは、やはり味方の損害が少なくすむという利点が決定的意味をもっていたからである。まして戦いに参加した、というより動員された騎士たちに十分な資力がなければ、戦いは一日でも短い方がよく、かつまた報酬を得られればそれに越したことはない。ヴォルフラム・フォン・エッシェンバハ(Wolfram von Eschenbach)の『パルチヴァール』(Parzival)では、主人公の父親ガハムレト(Gahmuret)は貧困ゆえに報償をあてにした奉仕を女王ベラカーネ(Belakane)に申し出たことが記されているが⁵¹、『ディートリヒの敗走』や『ラヴェンナの戦い』でいやがうえにも目につく報償を強調するシーンも、軍役に対する当時の一般的な考え方を反映するととらえてよい⁵²。「身代金などどうでもよい」あるいは「もはや生き延びようとは思わない」等の表現は、たしかに情緒的なものではあるが、騎士身分の人々にとっては日常のさまざまな労苦に対する報いをすべて放棄すること、そしてそれほどまでにすさまじい怒りがあったことを含意しているのである。

50 Josef Fleckenstein: Das Rittertum in der Stauferzeit. In: Die Zeit der Staufer. Geschichte - Kunst - Kultur. Hrsg. von Reiner Hausscherr. Bd. III. Stuttgart: Württembergisches Landesmuseum 1977. S. 103-112, hier S. 103; Otfried Ehrismann: Ehre und Mut, Aventure und Minne. Höfische Wortgeschichten aus dem Mittelalter. München: Beck 1995. S. 172f.

51 Wolfram von Eschenbach: Parzival. Mhd. Text nach der Ausgabe von Karl Lachmann. Übersetzung und Nachwort von Wolfgang Spiewok. Stuttgart: Reclam 1981 (RUB 3681) 17, 11f.; 加倉井爾之・伊東泰治・馬場勝弥・小栗友一(訳)『パルチヴァール』(郁文堂)1974年、9頁。

52 なお両作品には主従関係の混乱があり、去就が定かでない騎士たちが多数登場しているが、このような時、戦力として傭兵が期待されるのは当然である。『オットー・フォン・ザンクトブライズィエンの年代記』にも「戦争遂行に最適な800人の傭兵たち」(sariantos octingentos ad bellum instructissimos)と、社会の共通認識を前提とすると考えられる表現がある(Die Chronik Ottos von St. Blasien (→註24), S. 54)。当時すでに、封土の授受を仲立ちとした封建的主従関係による軍役奉仕はあまりあてにならず、むしろ傭兵のほうが戦力としてはるかに頼りになるという観念が社会に広くゆきわたっていたからである。Vgl. auch Ohler, Krieg und Frieden im Mittelalter (→註31), S. 149f. しかしこうした「報酬」は必ずしも傭兵のみを対象としたものではなく、封建的主従関係を前提とする軍役でも支払われていたことが近年明らかにされており(Peter Thorau: Der Krieg und das Geld: Ritter und Söldner in den Heeren Friedrichs II. In: Historische Zeitschrift 268 (1999), S. 599-634)、「ディートリヒの歴史叙事詩」の解釈にきわめて重要である。この点については稿を改めて論じたい。

4. 中世日本文学における類似表現との比較と展望

戦場や刑場に残された遺体に鳥獣が群がる、あるいは振り下ろした剣が頭蓋骨を砕くというような「残酷な描写」は、むきだしの武力にものをいわせる限り必然的に生じるものである。したがって時代をこえる普遍性をもつモチーフにもなる。中世の物語作者たちがたとえ聖書や古典作家の描写技法を参照することはあっても、そうした文書の記述は、けっして彼らが生きた時代の現実から遊離しているのではない。それどころか、こうした描写は時代だけでなく地域や文化の違いも超えた広がりが確認できる。中世日本の文芸に限っても、西洋の＞beasts of battle＜と対照すべきモチーフは容易に見出すことができる。

たとえば『保元物語』では、源為義の北の方が夫と子供たちの死を知らされ、遺体のありかをたずねようとしながらも、悲惨な光景を目の当たりにすることを恐れて次のように述べる場面がある。

空^{むな}しき^{かばね}骸をも見ばやと思へども、今は、定めて、犬^{からす}も引き散らしぬらん。かしここより、かはゆげなる死骸^{しがい}どもを求め出だして、これは乙若^いが手よ、かれは天王^{おとわか}が足よなど見んも、目も当てられじなれば、泣く泣く行かじと思ふなり。⁵³

天正本『太平記』では、知慮ある人が大規模な闘犬を苦々しく思い、野原に放置された遺体に犬が群がるかのようにだと嘆く。

智ある人はこれを聞きても、「あないまいまし。ひとへにこれ郊原^{かうげん}に尸^{かばね}を争ふに似たり」とぞ悲しみにける。⁵⁴

また小稿で取りあげた他の表現やモチーフについても、類似の描写はけっして少なくない。同じ天正本『太平記』に、名手の射た矢が敵将の眉間に命中し、脳を砕き骨を破ったあげく、首の骨の端に血塗れた矢先の突き出たさまが語られる。

切つて放ちたる^{つるおと}絃音いまだ納まらざるに、さしたる^{やつぼ}矢坪一寸もたがはず、尾張守^{かぶと}甲の^{まつかう}真額のはづれ、眉^{まゆ}の真只^{まつただなか}中にぐさと立つて、脳を砕き骨を分けて、頸^{くび}の外へ、矢前^{やさき}血をかづいでぞ出でたりける。⁵⁵

53 信太周・犬井善壽（校注・訳）『保元物語』（柳瀬喜代志・矢代和夫・松林靖明・信太周・犬井善壽（校注・訳）『将門記・陸奥話記・保元物語・平治物語』小学館 2002年（新編日本古典文学全集41））、365-366頁。

54 長谷川端（校注・訳）『太平記』①（小学館）1994年（新編日本古典文学全集54）、257頁。

55 長谷川端（校注・訳）（→前註）、433頁。

『源平盛衰記』巻15には以下の記述がある。

兜の鉢を打破つて喉笛迄打裂かんと打ちたりけるに、太刀もこらへずして目貫穴の本より折れにけり。太刀は折れたれども、兜も頭も打破れて、真逆に河中へぞ落ちにける。⁵⁶

「死傷者の流したおびただしい血が川のように戦場をおおう」というトボスも同じく容易に集めることができる。天正本『太平記』から例を引く。

血は流れて大地に溢れ、袞々として洪河の如く、尸は行路に横たはつて、累々として郊原の如し。⁵⁷

これらは小稿で挙げた中世ヨーロッパのモチーフと直接対照しうる描写だが、同様の例を集めることは容易だろう。また比較の対象を拡大することも可能だろう⁵⁸。だが、日本の中世社会で成立した作品にみられる類似の表現をウェルギリウスや聖書と結びつけるのはアナクロニズムである。これらのパターンは、用いた作者が何らかの典拠から引用した可能性もあるが、彼らの身近で繰り返し起きていた状況を描写したと考えてよい。上記のフォーアヴィンデンやクレグラーフの例は措くとして、従来の西洋文学研究では古典に範をとったことが当然視されてきた定型表現も、その描写対象となる事件が現実の社会で常に生じていたからこそ発生し、かつ生きつづけたのではないだろうか。洋の東西を問わず、弓矢や刀剣で戦う世界では、それはやはり必然だったにちがいない。

では個々の表現モチーフは、作品の中でいかなる意味を持つだろうか。「ディートリヒの歴史叙事詩」では、すでにみたように、パターン化した表現が繰り返し用いられている。それらのパターン自体は、> beasts of battle <を典型として、他のジャンルの作品群との比較が可能である。すなわち、Intertextualitätの考え方によって説明することができよう。しかしそれらがどう組み合わせられているかを考えるならば、作品それぞれの構成論理を把握する必要がある。> Beasts of battle <のようなモチーフやさまざまなキーワード（たとえば「復讐（する）」（râche, rechen））は、それ自体完結したまとまりの中で使われて役目を終えるのではなく、必ず次のステップへの呼び水となり、エスカレートする紛争を物語るメカニズムの中に位置づけられていることを認識しなければならない。

56 水原一（考定）『新定源平盛衰記』第2巻（新人物往来社）1988年、245頁。

57 長谷川端（校注・訳）『太平記』（→註54）、539頁。

58 たとえば『陸奥話記』に、「三十余町の程、斃亡せる人馬、宛も乱麻の如し。肝胆地に塗れ、膏膩野を潤す」（死人の内臓が地に塗れ、亡骸から滲んだ膏膩が野原を濡らしている）場面がある。『陸奥話記』（→註53）、165頁。

《SUMMARY》

'Beasts of battle' in der historischen Dietrichepik

TERADA Tatsuo

Bei dem Motiv des 'beasts of battle' handelt es sich um Tiere und Vögel, denen die hinterlassenen Leichen der gefallenen Krieger auf dem Schlachtfeld ausgesetzt werden. Den Literaturhistorikern ist schon lange bekannt, dass dies eines der typischen Stilmittel der Heldendichtung ist. In ihrer Forschung findet sich aber manchmal keine Erwähnung davon, dass es sich mit der Erzähltechnik von Vergil (> Aeneis < X, 559f.) oder der Bibel (> Jeremia < 19, 7) verbinden lässt. Das Motiv ist sogar nicht nur in der Heldendichtung, sondern auch in anderen Gattungen der mittelalterlichen Literatur weit verbreitet (z. B. > Apollonius <, > Perceval < Chrétien de Troyes). Wenn man überdies die Perspektive auf die Geschichtsschreibung (z. B. > Die Chronik Ottos von St. Blasien < Kap. 20) richtet, ist festzuhalten, dass es als Gemeingut des mittelalterlichen Schrifttums anzusehen ist.

Nicht zu vergessen ist dabei, dass die mittelalterliche Gesellschaft immer wieder im Kriegszustand war. Ein Kampf mit Schwert, Pfeil und Bogen war kaum zu vermeiden und forderte immer Opfer. Es ist daher anzunehmen, dass dieses Motiv so lange überlebte, weil die grausam anmutende Situation für das ganze Mittelalter aktuell war und viele Dichter und Schreiber dazu motivierte, solche Szenen – ganz unabhängig von ihrer Kenntnis des Themas in der klassischen Literatur oder der Bibel – in ihren Schriften zu schildern.

Im Rahmen der historischen Dietrichepik (> Dietrichs Flucht < v. 8459–8461, 9891f. [Vgl. > Rabenschlacht < Str. 526, 5–527, 6]) hat dieses Motiv einen eigenen Stellenwert. Vor dem Hintergrund dieser Darstellung findet sich die Beerdigung der Frauen, die von Ermrichs Heer erhängt wurden, und danach wird die Tugend von Dietrich dadurch betont, dass er befiehlt, nicht nur seine im Blutbad eingetauchten Krieger, sondern auch die Leichen der Feinde herauszutragen und zu begraben. Der gelungene Kontrast dieser Szenen hat auch einen festen Platz im Mechanismus der Konfliktsteigerung, bei der Brutalität, Schonungslosigkeit und Rachedgedanken zunehmend oft thematisiert bzw. dargestellt werden.

Man sollte das Motiv des 'beasts of battle' nicht nur als Gegenstand der Intertextualität, sondern auch im Hinblick auf die Handlungslogik betrachten. Ein interkultureller Vergleich würde Anregungen bringen, da das gleiche Motiv z. B. auch in der japanischen Literatur des Mittelalters Verbreitung gefunden hat.